Osaka Shoin Women's University Repository

『浮雲』管見 ―― 文三の恋着を中心に ――

木村有美子

はじめに

二葉亭四迷の『浮雲』が発表されてからはや一世紀を越える時が流れたが、その間、この作品は様々な視点から論じられて来た。『浮雲』の研究史については、畑有三氏の「二葉亭研究の現段階」（「日本文学」25巻3号　昭51・3）、藤井淑禎氏の「『浮雲』研究の現段階」（「東海学園国語国文」26号　昭59・10）、鈴木啓和氏の「二葉亭四迷『浮雲』」（「解釈と鑑賞」57巻4号　平4・4）等が、各時点に於ける到達点と課題とを提示しているので重言を避けるが、鈴木氏の言を借りれば、〈それまでの作家の意図を重視するものから作品をテクストとしてとらえ、テクストを読み解いていく方法〉が現在の『浮雲』研究の〈主流〉であるという。しかしながら、この杉山康彦氏[注1]、越智治雄氏[注2]に始まり、小森陽一氏の一連の追究[注3]に受け継がれたテクスト重視の方法 ―― 勿論各々分析方法は異なるが ―― をもってしても、『浮雲』に於けるあらゆる問題点が解決されたわけではない。『浮雲』研究を大きく前進させた語り論の導入も、一方ではその分析方法で摑みきれない部分の読みを歪曲させる、一種の枷になっている観もある。

藤井氏の指摘どおり、作品外にも〈個々の事情に即した柔軟なアプローチ〉を求めるべきであろうが、本稿ではもう一度テクスト読解の原点に立ち戻り、一読者の素朴な視点から文三のお勢への恋着について考察してみたいと思う。更に、それをふまえて、第十六回の〈識認〉と第十九回の〈故の吾〉〈眠った本心〉との関係についても言及することにしたい。

一、文三はお勢のどこに惹かれたのか

Osaka Shoin Women's University Repository

高田瑞穂氏は、「日本近代文学の宿命・序説 ―『浮雲』考―」[注4]の中で

文三にとって、お勢の魅力とは何であったろうか。（中略）彼女の「清浄」、「潔白」のあかしはどこにあったか。それは彼女の「人ぢやないの、アノ真理」という発言である。（中略）文三の恋慕は、感性、情欲によってお勢に引かれたのではなく[注5]、彼女の対象は、現実の女性お勢であるよりは、彼女の上に彼が勝手に仮設した「清浄なるもの」、「潔白なるもの」、換言すれば理想の女性にほかならなかったという事情である。

と述べている。文三がお勢に〈理想の女性〉像を求めていた点について異論はないが、〈感性、情欲によって〉惹かれたのではないと断言する点については疑問を抱かざるを得ないのである。

本文に沿いながら文三のお勢に対する感情を追ってみると、まず第二回に、

唯怪しむ可きはお勢と席を同した時の文三の感情で、何時も可笑しく気が改まり、円めてゐた脊を引伸して頸を据ゑ、異う済して変に片付る。魂が裳抜ければ一心に主とする所なく、居廻りに在る程のもの悉く薄烟に包れて、虚有縹緲の中に漂ひ、有る歟と思へばあり、無い歟と想へばない中に、唯一物ばかりは見ないでも見えるが、此感情は未だ何とも名け難い。

或いは、

自分には気が付かぬでも文三の胸には虫が生た。なれども其頃はまだ小さく場取らず、胸に在ッても邪魔に成らぬ而己かそのムズ〳〵と蠢動く時は世界中が一所に集る如く、又此世から極楽浄土へ往来する如く、又春の日に瓊葩綉葉の間、和気香風の中に、臥榻を据ゑて其上に臥そべり、次第に遠り往く虻の声を聞きながら、眠るでもなく眠らぬでもなく、唯ウト〳〵としてゐる如く、何とも彼とも言様なく愉快ッたが、（以下略）

という記述がある。これは塾から〈お勢の帰宅した初より〉生じた文三の感情の描写である。〈怪しむべきは〉〈此感情は未だ何とも名け難い〉〈自分には気が付かぬでも〉という表現からもわかるように論理的説明のつかぬものであったが、これが恋の芽ばえであることは明らかであろう。が、この頃のお勢はといえば、塾頭の女丈夫の影響を受け、〈襦袢がシャツになれば唐人髷も束髪に化け、ハンカチで咽喉を緊め、鬱陶敷を耐へて眼鏡を掛け〉た、まさに〈天晴一個のキャツキャ〉、〈当時の「新しがり屋」の女学生の典型的〉[注6]な姿をしていた。その装束から言えば、文三の理想とした〈品格〉のある、高田氏の言葉を引けば〈清浄・潔白〉な女性像とは大きくかけ離れていたわけだが、それでも文三は、〈自分には気が付か〉ないうちにお勢に惹かれていた――つまり感覚的に引き付けられていたのである。

確かに、文三の恋は〈感性〉によってのみ助長されたわけではない。例えば、文三に英語を教授されてからお勢が文三の忠告を聞き入れて〈眼鏡を外して頸巾を取〉り、〈行処となく落着て、優しく女性らしく〉変貌したことなどは、〈おれを思ってゐるに違ひな

Osaka Shoin Women's University Repository

い〉根拠の一つとして（八回）文三の恋心を大きく膨らませたのである。ここには〈感性〉だけでなく一種の判断が働いている。その結果〈添度〉とまで思うようになるのだが、しかしこれも高田氏の言う〈清浄〉〈潔白〉といったお勢の精神性を認めた上でのことではない。文三はそれほどお勢の内面を把握してはいないのである。文三を〈親友〉だと言うお勢に対して、〈私にア貴嬢と親友の交際は到底出来ない。〉〈何故といへば、私には貴嬢が解からず、また貴嬢には私が解からないから〉（三回）と答える文三の言葉からも、それは読み取ることができるのである。

高田氏は〈人ぢやないの、アノ真理〉という言葉を、〈お勢の「清浄」、「潔白」のあかし〉とし、これによって文三が急速にお勢に惹かれていったかのように捉えているが、文三は〈真理〉という言葉を聞く以前に既に〈添度〉と考え始めている。第三回にははっきりと〈去年の暮から全半歳、その者の為めに感情を支配せられてきた〉と文三自身が告白しているのである。文三の恋はお勢の〈真理〉という言葉以前、お互いが〈解からない〉状態でいるうちに、既に生じていたと捉えるべきであろう。

とすれば、文三は一体どこに惹かれたのだろうか。この問に対するヒントは、全篇を通して繰り返し現れる、文三のお勢の美しさに対する賞賛、或いはその容姿に囚われている文三の様子に見出すことができるであろう。

例えば、第三回、お政が留守なのを慮って躊躇していた文三が、お勢の部屋に入っていくのは〈蠔の首を斜に傾しげて嫣然片頬に含んだお勢の微笑に釣られて〉のことであったし、月光を受けた瓜実顔にほつれ髪が戦ぐ様は〈慄然とするほど凄味〉のある美しさだと語られてもいる。第四回では、

瓜実顔で富士額、生死を含む眼元の塩にピンとはねた眉で力味を付け、壷々口の緊笑ひにも愛嬌をくゝんで無暗には滴さぬほどのさび、背はスラリとして風に揺めく女郎花の、一時をくねる細腰もしんなりとしてなよやか、（中略）七難を隠くすといふ雪白の羽二重肌、（以下略）

と、〈衣透姫に小町の衣を懸けた〉と文三が〈品題〉てる、〈十人並優れて美くしい〉お勢の容姿が具体的に示されている。

また、次に挙げる四例は、文三が憤りや疑念を抱いている最中であっても、お勢の艶顔に惑わされる様子（傍線部分）を描いている。

・今突然可愛らしい眼と眼を看合はせ、しほらしい口元で嫣然笑はれて見ると……淡雪の日の眼に逢ツて解けるが如く、胸の鬱結も解けてムシヤクシヤも消え〳〵になり、今までの我を怪しむばかり、心の変動、心底に沈んでゐた嬉しみ有難みが思ひ懸けなくもニツコリ顔へ浮み出し懸ツた（五回）

・常さへ艶やかな緑の黒髪は、水気を含んで天鵞絨をも欺むくばかり。玉と透徹る肌は塩引の色を帯びて、眼元にはホンノリと紅を潮した塩梅、何処やらが悪戯らしく見えるが、ニツコリとした口元の塩らしい所を見ては是非を論ずる遑がない。文三は何も角も忘れて仕舞ツて、だらしも無くニタ〳〵笑ひながら、（以下略）（八回）

Osaka Shoin Women's University Repository

・文三は恐ろしい顔色をしてお勢の柳眉を顰めた嬌面を疾視付けたが、恋は曲物、かう疾視付けた時でも尚ほ「美は美だ」と思はない訳にはいかなかッた。折角の相好もどうやら崩れさうに成ッた（十回）

・早く顔を視たい、如何様な顔をしてゐるか。顔を視れば、どうせ好い心地がしないは知れてゐれど、それでゐて只早く顔が視たい。

（中略）今に起きて来るか、と思へば、肉瘠ゆい。髪の寝乱れた、顔の蒼ざめた、腫瞼の美人が始終眼前にちらつく。

「昨日下宿しようと騒いだは誰で有ッたらう、」と云ッたやうな顔色（十四回）

特に、右の引用文中、十回に於ける場合などは、文三は昇の噂をするお勢に憤りを感じ、お勢もまた文三に笑顔を向けているわけではない。にもかかわらず文三は〈美は美だ〉と思わずにはいられないのである。こうした記述からも、文三がお勢の美しさに惹かれていたことは明らかであろう。

このように考えると、前述の高田氏の〈感性、情欲によってお勢に引かれたのではな〉いとする捉え方には首肯しかねるのである。〈情欲〉の方はともかくも、〈美は美だ〉という把握は〈感性〉以外の何ものによっても為されない。文三は〈感性〉、言葉を換えて言うならば、論理の届かない〈感情〉的、感覚的な部分でお勢に惹きつけられていたのである。

二、文三の恋愛の理想と実態

村上孝之氏は「ロマンチック・ラヴの成立と崩壊 ―二葉亭四迷の場合―」[注7]の中で、〈文三がお勢に惹かれる理由は、彼女の「美」であった。〉と述べ、〈美〉が〈愛の根源的動機〉として描かれていることを指摘している。ただ注意すべきなのは、村上氏の言う〈美〉は〈器量が第一義的な問題〉として扱われた近世的な〈器量〉よしとは同次元ではない点である。

「美」とは「恋愛」と同じように明治が生んだ翻訳語であった。

（中略）こうした外来のコンテクストにおいて女性の「美」が語られる時、女性は神格化され、恋愛という行為に精神的価値が付与され始めるのである。

確かに文三にとって、〈美〉は〈愛の根源的動機〉であった。お勢の美しさに惹かれていることは疑いないが、既に引用したとおり、互いに〈解か〉りあわねば〈親友の交際〉は出来ないという内面重視の発言もする。村上氏の所謂〈精神的価値〉の〈付与〉を行おうとしているのである。そもそも文三は、〈男女交際論の得失〉を論じる（二回）〈同権論者〉（十回）という側面を持ち、女性に対する新思想の持ち主として描かれている。

・凡そ相愛する二ツの心は、一体分身で孤立する者でもなく、又仕ようとて出来るものでもない故に、一方の心が歓ぶ時には他方の心も共に歓び、一方の心が悲しむ時には他方の心も共に悲しみ、一方の心が楽しむ時には他方の心も共に楽み、一方の心

Osaka Shoin Women's University Repository

が苦しむ時には他方の心も共に苦しみ、嬉笑にも相感じ怒罵にも相感じ、愉快適悦、不平煩悶にも相感じ、気が気に通じ心が心を喚起し決して齟齬し扞格する者で無い（以下略）（八回）

・相愛は相敬の隣に棲む（八回）

という恋愛の理想をも抱いていた。とすれば、文三は互いの内面を重視した、極めて近代的な恋愛観の持ち主であったと言わねばならない。

その文三がお勢の内面をどう捉えていたか。それは、お勢の容姿に対する記述と比較すると少なく、全篇を通して数箇所しかない。

まず一つ目として挙げられるのは、〈親より大切な者〉を〈真理〉と答えるお勢の言葉を、お勢の〈清浄〉〈潔白〉な内面の表出だと捉える場面である。勿論文三はお勢の口から自分の名が出ることを期待していたわけで、〈真理〉という言葉は全く予想外であった。文三が〈貴嬢は御自分が潔白だから是様な事を言ッてもお解りがないかも知れんが、私には真理よりか（中略）大切な者があ〉る、〈その者の為に感情を支配せられて、（中略）死ぬより辛いおもいをしてゐ〉るのだと語る時、お勢の〈真理〉は文三の〈感情〉に対比するものとして受けとめられている。そしてこの対比は、〈真理〉から〈清浄〉〈潔白〉という一見脈絡のない連想を引き出すことになった。これは図らずも文三の〈感情〉の中味を読者の前に示している。〈清浄〉〈潔白〉に対峙する〈感情〉はおそらく性的な匂いを含むものであったろう。(注8) お勢の〈真理〉という言葉は、第五回でお勢がふりまわす〈条理〉と同じく、文三の教授によって得た受け売りでしかないことは自明であるが、文三には、自分の性的願望を含む恥ずべき〈感情〉と対比すべき高い精神性を示す、お勢の内面の表出として捉えられたのである。

しかし、これも強ち無理なことではなかった。そもそも〈真理〉は文三のボキャブラリーであったわけで、その語の持つ意味も充分認識していたに違いないからである。が、それだけでなく、ここには文三の〈感情〉に対する考え方が大きく影響している。これほどに想っているお勢に対してすら、〈アゝ我々の感情はまだ習慣の奴隷だ。お勢さん下へ降りて下さい〉（三回）と言うほど、文三は〈感情〉に〈支配せられる〉ことを潔しとしない論理的人物であった。だからこそ、お勢の〈真理〉という言葉に、平生の方針を貫けない自己矛盾を衝かれた思いがしたのであろう。その〈感情〉の中に性的願望が潜んでいたとしたら、それは尚更のことである。文三の自意識の強さが〈真理〉という言葉に思いがけない真実味を与えてしまった、ということは充分考えられることなのである。

その他、文三のお勢の内面の把握は、自分の免職に際して、お勢が〈落胆したからと言って心変りをするやうな其様な浮薄な婦人ぢやアなし、且つ通常の婦女子と違ッて教育も有ることだから、大丈夫其様な気遣ひはない〉（四回）と考えるところ、また、失意の文三を措いて昇と観菊に出かけたお勢を、昇に惹かれているのでは……と疑った時、〈お勢は所謂女豪の萌芽だ、見識も高尚で気韻も高く、酒々落々として愛すべく尊ぶべき少女であって見れば〉、昇などに〈怪我にも迷ふ筈はない〉（八回）と述べるあたりに現れている。

Osaka Shoin Women's University Repository

ここで文三は〈教育〉〈見識〉があるということを、〈浮薄〉な行動をとらない理由として考えているようだが、お勢の〈学問〉は、元々他人に優越感を感じるための一手段、ポーズに過ぎぬ皮相的なものであった。それは、〈「ナショナル」の「フォース」に列国史〉を勉強しているといいながら、〈I will ask for you〉といった初歩的な誤りを犯す語学力しか持ちあわせていない、という一事に象徴されているとおりである。ここには、〈学問〉を修めた者は〈浮薄〉さから免れると考える、〈学問〉への素朴な信頼と、(注9)こうあってほしいという願望があるばかりで、肝心のお勢の実態は全く浮かんで来ないのである。

また、文三のお勢の内面把握は、文三が何らかの危機的場面—少々表現が大袈裟かもしれないが—に出会う時、はじめて現れて来る。それは、お勢に〈真理〉という予期せぬレベルの言葉を突き付けられた時であり、突然免職になった時であり、お勢が昇に惹かれているのでは……と疑念を抱いた時なのであって、決して文三の恋が順境にある時ではないのである。これは、文三の視点が平生はお勢の外面に囚われて、内面を顧みることが少なかったことを示唆しているようにも思われるのである。

お勢の内面に対する一方的解釈は、〈おれを思つてゐるに違ひない〉と考える〈理由〉を述べる箇所にも現われている。

若し相愛してゐなければ、文三に親しんでから、お勢が言葉遣ひを改め起居動作を変へ、蓮葉を罷めて優に艶しく女性らしく成る筈もなし、又今年の夏一夕の情話に、我から隔の関を取除け、乙な眼遣をし麁匆な言葉を遣つて、折節に物思ひをする理由もない。

若し相愛してゐなければ、婚姻の相談が有つた時、お勢が戯談に托辞けてそれとなく文三の肚を探る筈もなし、また叔母と悶着した時、他人同前の文三を庇護つて真実の母親と抗論する理由もない。（八回）

と文三は考えるのであるが、読者から見れば〈文三に親しんでから〉〈女性らしく〉なったのも塾頭の女丈夫に〈感染れ〉たのと大差ない、現象面の変化に過ぎなかったし、また〈一夕の情話〉以来、〈水向け文句〉とはぐらかしとで文三を〈じら〉すお勢と、昇とふざけあうお勢とでは品位に於てどこに違いがあろうか。違っているのは文三と昇の対応の仕方ばかりである。文三は自分の時は〈触らば散らうといふ下心〉をお勢の態度に読み取って、内心〈癇癪じみるまで喜〉んだにもかかわらず、昇の時は〈実に淫哇だ〉〈品格々々と口癖に云つてゐるお勢が、彼様な猥褻な席に連ツてゐる〉と批判する。極めて自分に都合のいい解釈を行うのである。文三の縁談についてもお勢は単なる好奇心を示しただけであったかもしれない。免職の際文三を弁護したのも、母親の無学を笑い、学問のあることを顕示するためのものであったことは言うまでもない。それは、お勢が文三に〈教育の無い者は仕様がないのネー〉〈君の為に弁護したの〉と〈得意の体〉で言ったところに端的に示されている。それにお勢は元来金銭的観念など殆ど持ちあわせていないのだ。第十八回にお政と昇の公債の話に入りきれないお勢が描かれているが、免

Osaka Shoin Women's University Repository

職が経済的支えを失うことであっても、金銭的苦労を知らずに育ったお勢にとっては関心外の出来事であったに違いないのである。

こうしてみてくると、文三が捉えたお勢の内面は、文三に都合よくディフォルメされた一方的な把握の上に成り立っており、実態とは大きくかけ離れたものであったことがわかる。互いに〈解〉りあわねば〈親友の交際〉はできない、〈相愛は相敬の隣に棲む〉という、内面重視の近代的な恋愛観を持ち得ながら、文三はその根本にあるべきお勢の内面を見誤ったのである。亀井秀雄氏(注10)の指摘どおり、本来なら〈自分と違和し葛藤するだろう一個の独立した人格をお勢に認め〉〈それを克服する努力〉が不可欠であったのだ。その上で〈築かるべき関係〉こそ、〈お互の人格的敬愛に基づく恋愛〉だったといえる。

文三とお勢の関係を見てみると、この〈努力〉は全く払われず、逆に本音の陰蔽、切り捨ての上に進行している。一例を挙げてみよう。第三回には、お勢の〈触らば散らうといふ下心〉を感じ取った文三が内心非常に喜びながらも〈お勢の前ではいつも四角四面に喰ひしばって猥褻がましい挙動〉をせず、〈じやらくらが高じてどやぐやと成ッた時〉には〈くすぐりに懸ッた〉お勢の手を〈払らひ除けて〉〈「アヽ我々の感情はまだ習慣の奴隷だ。お勢さん下へ降りて下さい」といった〉場面が描かれている。ここには、自分の本心もさらけ出さず、ただ〈感情〉の囚になることを潔しとしない自分の理想を唐突に突き付けている文三の姿が浮かび上がっている。言うまでもなく、この時お勢がどんな気がしたか、などという考慮は全く切り捨てられている。近代的恋愛が互いの〈人格〉を認めあうことから出発するという自覚を、文三は持ち得なかったと言わざるを得ないのである。

三、恋愛に於ける文三の無自覚

この文三の無自覚を更に追ってみると、男性主導の男女関係を容認する意識が垣間見えて来る。元々、文三の恋はお勢に英語を〈教授〉するところから進展し始めた。そして前述したとおり、お勢が文三の忠告を受け入れて装束を改めたことによって一層助長されたのである。お勢を〈天晴一個のキャツキヤ〉から〈優しく女性らしい〉女性に変えたのは自分の助言である、自分の教えが彼女を変えたという自負は、教え導く者として、自分をお勢より一段高い位置に置いて捉える、換言すれば男性主導の意識、発想をお勢との間に持ち込むことになったのではなかろうか。

第十六回、十九回では、この意識はもっと明確に打ち出されている。

・お勢の如き、まだ我をも知らぬ、罪の無い処女が己の気質に克ち得ぬとて、強ちにそれを無理とも云へぬ。若しお勢を深く尤む可き者なら、較べて云へば、稍々学問あり智識ありながら、尚ほ軽躁を免がれぬ、譬へば、文三の如き者は（中略）何としたもので有らう？（十六回）

・早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠った本心を覚まさなけ

Osaka Shoin Women's University Repository

ればならん、が、しかし誰かお勢のために此事に当らう？（中略）ただ文三のみは、愚昧ながらも、まだお勢よりは少しは智識も有り、経験も有れば、若しお勢の眼を覚ます者が必要なら、文三を措いて誰がならう？（十九回）[注11]

確かに学問的には文三はお勢より上であったろうが、こうした関係が人格を把握することなしに成立しているところを問題としたいのである。

この、自分をお勢より優位におく意識は、〈相愛する二ツの心〉について述べる際にも現われている。文三は、〈相愛する二ツの心〉は喜怒哀楽を〈相感じ〉あうものであって、〈決して齟齬し扞格する者で無い〉と述べ、〈今文三の痛痒をお勢の感ぜぬは如何したものだろう〉と疑問に思うのであるが、この疑念は自己中心的に発想されている。もし互いの心が〈相感じ〉るのであれば、逆に文三もお勢の心を慮らねばならないはずであるが、その視点は全く欠落している。自分の一方的な恋心（イコール）＝お勢の内面を知り得ること、と錯覚し、その誤りには全く無自覚なのである。ここにもお勢の方から文三の〈痛痒〉を感じるべきだという一方的な文三優位の意識が現れているとは言えまいか。〈相感じ〉あう相互理解からかけ離れたものであったことは疑いないのである。

もう一点、文三の意識を追う上で指摘すべきは、文三のお勢への恋情が常に〈添〉う、つまり結婚という到達点ばかりを目ざしている点である。互いの人格の相克を克服した上で恋愛が成立するならば、そのプロセスこそ重要であるはずなのだが、文三の場合そうではなかった。

文三がお勢と〈添度〉と考え始めたのは、お勢が塾より帰宅したその夏頃のこと、第二回には、〈窃かに叔母の顔色を伺ッて見れば、気の所為か粋を通して見て見ぬ風をしているらしい。「（中略）寧そ打附けに……」〉と結婚の申込みをしようかと考えるが、〈取着かれぬ返答〉を怖れて言い出し兼ねていた、とある。ここでもわかるように、お勢と〈添〉うためには、何としても園田家を取りしきっているお政の機嫌を〈損ねぬ〉ようにせねばならない。ここには叔母が幼い時から世話になった〈有恩〉の人であるという特殊な事情もあるわけだが、お勢との結婚を意識してからの文三は、眼前のお勢よりお政に気兼ねし始める。お政の留守中、お勢の部屋に入るのにも〈影口が耳に入ると厭なもの〉だと気にするし、免職になった時にも〈急にお勢を呉れるのが厭になッて、無理に彼娘を他へかたづけまいとも言はれない〉と心配もするのである。免職を境に文三はお勢との〈縁をも繋ぎ留め〉るため、〈お勢の事を断念らねばならぬやうに成行〉かさないために、ますますお政の一挙一動に神経を尖らせるようになる。石田に就職を依頼したと報告した時に、お政が〈余所事に聞流してゐ〉たのを気にしたり（九回）、〈「三方四方」丸く納まる〉というお政の言葉に、その〈心事〉を〈思惟〉する努力を払ったり（十一回）するのである。また、お政の〈云ひ掛り〉的な言葉にも反抗せず、唯わびる文三の姿も、第五回、十五回に描かれている。このような例は、お勢と口論した二日後、文三が〈示談〉を試みてお勢にはねつけられる第十五回に於ても見ることがで

Osaka Shoin Women's University Repository

きる。〈示談〉に失敗し二階に戻った文三が、まず最初に頭に浮かべたことは、

「失敗ッた」（中略）「今にお袋が帰ッて来る。『慈母さん此々の次第……』失敗ッた、失策ッた。」

というお政への気遣であって、お勢その人へのやるせなさではないのである。

ここにも近代的恋愛の理想像を掲げながら、一個の人格としてお勢を尊重し、互いに成長しあうプロセスを踏めない文三の姿を見ることができる。少々穿って捉えるならば、文三の結婚観が親の了承さえ得ればよいとする前近代的な「家意識」から脱却できていなかったことを示している、とも言えるのではないか。「結婚」は〈一家を成〉すことと密接に絡みあっており、〈一軒の家を成やうになれば家の大黒柱とて無くて叶はぬは妻〉という文三の老母の手紙は、正しく当時の世間一般の、そして文三の意識の代弁でもあったのでなかろうか。第十回の〈叔父の留守に不取締が有ッちや我が済まん〉という文三の言葉には、父不在の園田家に於て家長的立場にいた文三の「家意識」が現われている。文三もまた「家」の呪縛から自由ではなかったのである。それが恋愛のプロセスより〈添〉うという到達点を、本人よりも母親を重視する、主客転倒に繋がったのではないかと思われる。

以上述べたように、文三の恋愛の実態は、その掲げた理想像とは裏腹な、多分に前近代的要素を残すものであった。[注12] お勢の〈美〉に対する憧憬は〈恋愛の根本的動機〉とは成り得たが、〈精神的価値〉を付加するところまで高められはしなかった。近代的恋愛の成立に不可欠な、互いの人格、内面の把握を欠いたところに、その主原因があったと言わざるを得ないであろう。

四、第十六回の〈識認〉をどう捉えるか

『浮雲』を読解していく上で、最も問題となるのは、第十六回の文三のお勢の本質についての〈識認〉と、第十九回の、お勢に〈故の吾〉〈眠った本心〉があるかのような文三の発言とをどう捉えるか、ということであろう。

藤井淑禎氏[注13]は、〈第十六回の「識認」と鋭く対立するのは、結局はお勢に「故の吾」や「眠った本心」があると考えてしまう文三の妄想で〉あるとし、

作品の進行につれて文三がお勢への疑いを深め、次第に語り手の評価位置に近づいてゆくなだらかなコースを想定した場合、第十六回の「識認」だけが頭ひとつ飛び出てしまっていることがあげられよう。ここでの「識認」をその頭ひとつ分だけひっこめて不確かなものにすれば、つまり文三がお勢の本質を未だ完全には見抜いていないことにすれば、第十九回を初めとするその他の回とはなだらかな一本の曲線で結ばれるのである。

と、第十六回の〈識認〉が〈勇み足〉である可能性を、他の根拠とともに提出している。

確かに、十六回の〈識認〉は、〈真闇な坐舗に悄然として〉いた

Osaka Shoin Women's University Repository

文三がいきなりお勢の本性を知るという唐突感を読者に抱かせるものであり、この〈識認〉を〈頭一つ飛び出〉た作者の〈勇み足〉と捉えた方が自然な読解に叶うようにも思われる。そうすれば、第十九回の〈故の吾〉〈眠った本心〉も、〈識認〉を得ていない文三の〈妄想〉として矛盾なく受けとめることができるのである。

が、本稿では、あえて現存のテクストに新たな読解の可能性が残されていないかを、今まで見て来た文三の恋着を中心に探ってみたいと思う。

まず、第十六回で文三が〈識認〉を得るだけの背景があったかどうかについて考えてみる。小森陽一氏[注14]は第十二回を〈破局〉と捉えている。なるほど文三とお勢とが会話らしい会話を交すのもこの回が最後、二人の仲はこれ以降全く進展してはいかないのだが、これはお勢の側から見た〈破局〉ではあっても、文三には〈破局〉とは受けとめられていないのではないかと思う。何故なら第十三回以降に於ても、「本田さんが気に入りました」というお勢の言葉を〈一時の激語〉であったかもしれぬ、夕食もとらずに休んだのは、自分と〈同じやうに苦しんでゐる〉せいかもしれぬ、と相変らず自分に都合のいい〈分疏〉を設けて、その恋着を継続させているからである。

〈破局〉と呼ぶべきなのは、むしろ第十五回ではなかろうか。文三はお勢に再び〈示談〉をもちかけるが、お勢に手厳しく拒絶される。ここまでなら第十二回と同じなのであるが、その後、お政の前で文三は、

人の事を浮気者だなンぞッて罵ッて置きながら、三日も経たないうちに、人の部屋へつか〳〵入ッて来て……（中略）云ふ事が有るなら、茲処でいふがいゝ、慈母さんの前で云へるなら、云ッてみるがいゝ……

とお勢から罵倒されるのである。この場面で留意すべきは、お勢、お政の双方から文三が糾弾されているという点である。それまでの文三は、免職をお政に非難された時にはお勢の〈弁護〉を受け（五回）、昇とふざけるお勢に疑念を抱いた時にはお政の〈「三方四方」丸く納まる〉という言葉にお勢との結婚の可能性を期待する（十一回）というように、お勢、お政のどちらかに救いを見出して来たのである。が、この第十五回に至ってはじめて文三は、眼前に双方を置いた形で糾弾されたのである。つまり、結婚の可能性はこの時、絶望視されるに至ったのである。

そのような状態――お勢との結婚に結びつくあらゆる〈妄想〉の芽を摘み取られた状態に追いつめられて、はじめて文三は〈情欲の曇が取れて心の鏡が明か〉な（十六回）心境になれたのである。ここに於て漸く、お勢の本質を〈識認〉し得る土壌ができたとも言える。

では、第十六回で文三が得た〈識認〉の中味はどのようなものであったのか。まずそれは、

過まッた文三は、――実に今迄はお勢を見謬まッてゐた。今となッて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無。移気、開豁、軽躁、それを高潔と取違へて、意味も無い外部の美、それを内

Osaka Shoin Women's University Repository

部のと混同して、愧かしいかな、文三はお勢に心を奪はれてゐた。

と語られる。

ここで見落としてならないのは、この文三の〈識認〉が〈外部と内部とを区別するという前提のもとに成りたつ〉っている[注15]という点である。続けて文三が、〈苛めにも人を愛するといふからは、必ず先づ互ひに天性気質を知りあはねばならぬ〉と述べるのとあわせて考えれば、この〈識認〉が極めて〈内部〉――内面重視の傾きを持つものであるのが窺える。それは〈意味もない外部の美〉という表現からも読み取ることができる。

ここに至て文三は〈今となッて考へてみれば、お勢はさほど高潔でも無。移気、開豁、軽躁〉であったと〈識認〉する。これは、〈清浄〉〈潔白〉（三回）、〈女豪の萌芽〉〈見識も高尚で気韻も高〉い（八回）と捉えられていた文三のお勢像が、漸く実態に迫ったことを示しており、何ら異議を挟む余地もない。

ただ注意すべきは、この〈識認〉によって訂正されたのは、あくまで論理的な〈智慧〉によって捉えることのできる部分――つまりお勢の内面に対する把握でしかなかった、という点である。〈内部〉を重んじる立場から〈意味も無い外部の美、それを内部のと混同して（中略）心を奪はれていた〉という反省が生まれてはいるが、お勢の〈外部の美〉――前述したとおり、論理の力の及ばない感性の部分で文三を惹きつけていた美しさ――そのものの否定にはなっていないのではなかろうか。

だからこそ、第十九回で、人違いをしたお勢に〈やさしく物を言ひかけられ〉〈徒莞爾〉されただけで、〈文三は酒に酔った心地、如何仕ようといふ方角もなく、只茫然として殆ど無想の境に彷徨ッて〉しまうのである。この状態は〈識認〉を得る以前の、お勢の美しさに囚われ〈是非を論ずる遑〉もなく〈何も角も忘れて仕舞〉う文三と同一と言わねばならない。お勢の本性を〈識認〉したはずの文三がなぜ再び〈迷ふ〉のか。それはこの〈識認〉があくまで論理のレベルでの〈識認〉で、そもそも文三の恋を支えて来た感性の部分まで変え得るものではなかったことを示している。こうして文三の恋着は、〈危い境〉にいるお勢の救済者として姿を変えつつも最終回まで生き続けることになったのであろう。

藤井淑禎氏は、〈「文三は――全くとは云ず――稍々変生ッた」とあるにもかかわらず、お勢の本質への認識に関しては、「全く」といっていいほど考えを改めてしまっている〉点について、〈作者の真意〉は〈この「稍々」のほうに〉あったのではないか[注12]、と第十六回の〈識認〉を〈勇み足〉と考える根拠にあげている。藤井氏の指摘どおり、文三は論理的に捉えられる〈お勢の本質〉に関しては以前の〈識認〉を〈「全く」といっていいほど〉改めている。この点について〈全く〉〈変生ッた〉わけである。が、前述したように、文三は〈識認〉を得た後も感性の部分でやはりお勢に囚われているのである。これでは不完全な「変生」としか言えまい。つまり〈稍々変生ッた〉に過ぎなかったのである。

ところで、第十六回の〈識認〉にみられた〈外部〉と〈内部〉と

Osaka Shoin Women's University Repository

を区別する二元的な捉え方には疑問がないわけではない。現実に一人の人間をこのように分離して捉えられるかと言えば、否と答えざるを得ないからである。畑有三氏は、〈こうした考え方自体が非常に観念的〉であり、〈現実についての妥当な認識ではありえない〉と述べている(注15)が、全くそのとおりであろう。

が、『浮雲』を読み返してみると、第十六回だけでなく、文三の思考、行動のパターンが既に二元性を持つものとして描かれているのである。別稿(注16)で触れたことなので概略を述べるにとどめるが、文三はお勢への恋着から生じる〈感情〉をそのまま受けとめられず、それは決して恥ずべきものではないと正当化する〈論理づけ〉を行わずにはおられない。そして、その〈論理づけ〉による〈分疏〉や〈大義名分〉が見出せた時、はじめて行動できるのである。この〈感情〉と〈論理〉は俗な言葉を用いれば〈本音〉と〈建前〉と言い換えられるものであり、第十三回あたりまでは、文三に明確に区別され意識されるものとして描かれている。そして、この二元的設定は、常に〈論理〉を必要とする文三の士族的気風と、学問を修めた人間であるという意識とを浮かび上がらせてもいるのである。従って、第十六回に於ける〈外面〉〈内面〉の二元的把握は、文三にとって決して唐突な発想によるものとは言えない。ある意味では以前から持ちあわせていた〈感情〉と〈論理〉という意識の延長上に誕生したと言えるかもしれないのである。

五、第十九回の〈故の吾〉〈眠つた本心〉をどう捉えるか

次に第十九回の〈故の吾〉〈眠つた本心〉について考えてみたい。前述の藤井氏の指摘にあったように、第十六回のお勢の本質についての〈識認〉の後、第十九回にお勢に〈故の吾〉〈本心〉があるかのような発言が出て来るのは、やはり矛盾と呼んだ方が妥当なのかもしれない。第十六回の〈識認〉と共存できないとすれば、第十九回のお勢に対する認識は〈妄想〉と考えざるを得なくなる。

実際、第十九回では文三の思考パターンであった〈本音〉と〈建前〉との区別が混沌となっている。また、〈健康な智識は縮んで、出過ぎた妄想が我から荒出し、抑へても抑へ切れなくな〉る、〈ふと例の妄想が働きだして無益な事を思はせられる〉といった文が散見するし、〈同一の事を間断なく〉思い続けた文三が、天井の木目から物理の授業風景、そして〈さるれえ〉の書へと、〈何の関係をも持たぬ零々砕々の事を取締もなく思ふ〉様子も描かれており、お勢に対する〈妄想〉が生まれても不思議ではない精神状態にあったことは充分うかがえるのである。

ただ、〈故の吾〉〈眠つた本心〉を文三の〈妄想〉として片付けてしまうことに少々の抵抗を感じるのも事実である。というのは、第十九回に於ても、読者が納得できる冷静な判断を文三が示している箇所も多いからだ。

例えば、園田家における自分の立場や、お勢をめぐるお政と昇の

Osaka Shoin Women's University Repository

かけひき、そして次のようなお勢に対する分析の部分である。

我心ながら我心の心地はせず、始終何か本体の得知れぬ、一種不思議な力に誘はれて言動作息するから、我にも我が判然とは分るまい、今のお勢の眼には宇宙は鮮いで見え、万物は美しく見え、人は皆我一人を愛して我一人のために働いてゐるやうに見えよう。（中略）また人の老やすく、色の衰え易いことを忘れて、今の若さ、美しさは永却続くやうに心得て未来の事などは全く思ふまい、（中略）総て男子に、取分けて、若い、美しい男子に慕はれるのが何となく快いので有らう（以下略）

これは一人の若い女性であるお勢を、一般論的ではあるが捉えているとは言えまいか。また、今のお勢の状態を、〈文三に感染れて少し畏縮た血気が今外界の刺激を受けて一時に暴れだし〉たのだとも述べているが、これは、第十六回の、〈多少文三に心を動かした如き形迹が有ばとて、（中略）只ほんの一時感染れてゐたので有ッた〉という把握をふまえてなされている。お勢に〈故の吾〉〈本心〉があったとする記述だけを〈妄想〉と考えていいものかという疑問はここに生じる。

そこで再度第十九回を点検してみると、〈故の吾〉〈本心〉の記述は、昇と関連した形で現れていることに気づく。〈昇に狎れ親んでから、お勢は故の吾を亡くした〉のであり、〈お勢は此危い境を放心して渡ッてゐて何時眼が覚めようとも見えん。（中略）早く、手遅れにならんうちに、お勢の眠った本心を覚まさなければならん〉のである。文三の言う〈危い境〉が具体的には昇の手中に陥りそうな状況を指しているのは言うまでもない。と考えれば、〈故の吾〉〈本心〉も、お勢の本質全体をさす抽象的な語ではなく、昇と関わる言葉として用いられているのではないかという気がして来る。

〈故の吾〉の記述の後には〈お勢は昇を愛してゐるやうで、実は愛してはゐず〉という一文が続く。この部分も、単に文三の昇に対するライバル意識の現れ、とのみ捉えてしまってはいけないのではないか。お勢が自分を愛しているようで唯〈感染れ〉ていたにすぎなかったのと同様に、今は昇に〈感染れ〉ているのだ、〈移気〉で〈軽躁〉なお勢にはありがちなことだ、という文三の考えを示しているとも受け取れるからである。このように把握すれば第十六回の〈識認〉と何ら矛盾しない。

文三が昇とお勢の関係を右のように捉えているとすれば、〈故の吾〉を「昇に〈感染れ〉る以前のお勢」、〈本心〉を「本当は昇を愛しているのではないというお勢の自覚」というように置きかえることも可能なのではないかと思う。では「昇に〈感染れ〉る以前のお勢」とは一体どのようなものなのか。これは勿論、文三の婚約者として予定されていた頃のお勢という意味ではなく、「昇の性的誘惑を拒絶していた頃のお勢」を指しているのである。文三が最も危惧していることは何か。〈危き境〉〈手遅れ〉という言葉が示しているように、お勢が昇と只ならぬ関係になってしまうことであった。これを考えれば、〈故の吾〉をお勢の処女性に関わるものとする捉え方も強ち無理とも言えないのではないか。そしてこのように解釈するならば、第十六回の〈識認〉と第十九回の〈故の吾〉〈本心〉と

Osaka Shoin Women's University Repository

は、『浮雲』という作品中に矛盾なく共存できるのである。(注17)

おわりに

以上論じて来たように、文三の恋着は第十六回の〈識認〉をもって論理的には終焉を告げる。が、論理の力の及ばない感性の部分で最後までお勢に囚われ続けるものだったと筆者は捉えている。そして、この文三の恋着は、論理と感性（感情）、内部と外部、理想と現実、近代と前近代といった様々な二元的要素を内包するものとして描かれていたことも明らかになったかと思う。本稿は、あくまでも現存するテクストを素朴に解読することを旨としたため、作者や当時の世相、思潮との関連等には全く言及しなかったが、この二元性に畑有三氏の指摘(注18)する〈この時代の発想の一つの特質、特徴〉、或いは〈日本の伝統的な儒教のものの見方〉を読み取ることは可能であろう。

『浮雲』を読む上で問題となる〈識認〉と〈故の吾〉〈眠った本心〉との関係については、文三の恋着をふまえた視点から管見を述べたが、その他、文三の学問の質の問題、第十九回の〈人情〉〈義理〉の解釈、中絶の理由等、問題とすべき点はまだまだ残されている。これらについては稿を改めて論じたいと思っている。

注記

(1) 「長谷川二葉亭における言文一致」（「文学」36巻9号　昭43・9）

(2) 「浮雲のゆくえ」（「国文学」16巻9、11、13号　昭46・7、9、10）

(3) 小森陽一氏の一連の『浮雲』追究は、『構造としての語り』（新曜社　昭63・4）中に集成されている。

(4) 「成城国文学論集」9号（昭52・1）

中村光夫氏は『二葉亭四迷論』（進路社　昭22・10）の中で、文三は〈「情欲によってお勢に恋したのではない。彼女に仮定された「高潔」に「心」を奪はれてゐたのだ。〉と述べ、更に第十六回の〈情欲の曇りが取れて〉という記述に対し、〈文三の心はかつて「情欲に曇った」ことなどないのである。〉と断言している。高田氏の指摘は、この中村説を踏襲したものだと言えよう。

(5) 本稿における傍点は全て筆者による。

(6) 畑有三氏の注釈（『日本近代文学大系　4巻　二葉亭四迷集』角川書店　昭46・3）による。

(7) 「比較文学研究」46号（昭59・9）

(8) 亀井秀雄氏は、文三が昇の〈痩我慢なら大抵にしろ〉という言葉に激昂したのは、〈お勢に対する欲望〉を〈痩我慢〉していると指摘されたように捉えたためではないか、とその自意識について論じている。この場面に通じる指摘であろう。（『日本の作家　37巻　戦争と革命の放浪者　二葉亭四迷』新典社　昭61・5）

Osaka Shoin Women's University Repository

(9) 同様の例は第十回、お勢が昇やお政とふざけているのを見て、〈平生の持論は何処へ遣ッた、何の為に学問をした〉と憤慨するところにも見出せる。文三にとって学問は、単に知識や新思想を身につけることではなく、品格を持ち、感情をコントロールすること、つまり論理的思考を意味していたし、お勢をめぐって昇より優位にたつための唯一の武器なのであった。

(10) 「制度のなかの恋愛―また恋愛という制度的言説について―」（「国文学」36巻1号　平3・1）

(11) 第十六回にはお勢に対する〈識認〉だけでなく、〈文三もよろしく無かッた〉という自省が散見している。が、自らの学問を問い直す姿勢はまるで見られないのである。免職の理由を課長個人の私怨によるものと捉え、大きな社会のうねりには無自覚であったり、〈気が弱くッちや主義の実行〉はできないと唱えながら明白な恋の告白も出来なかったり、昇やお勢との口論を〈Self-evident truth〉という言葉で打ち切ったり、平生の持論を度々崩壊させていながらも、学問に対する信仰だけは捨てていないのである。畑有三氏の指摘どおり（注(6)参照）、学問の質こそが問い直されるべきだったのである。

(12) 前掲「『浮雲』研究の現段階」（「東海学園国語国文」26号　昭59・10）による。

(13) 文三の封建的要素については松崎晴夫氏の言及がある。（「『浮雲』と二葉亭――その成立と挫折――」「民主文学」84号　昭47・11）

(14) 「他者の原像――『浮雲』における読者の位置――」（「成城国文学論集」15集　昭58・5）

「構成論の時代――四迷・忍月・思軒・鷗外――」（「文学」52巻8号　昭59・8）

後、『構造としての語り』に収録。注(3)参照

(15) これについてはシンポジウムでの畑有三氏の指摘がある。（「シンポジウム『浮雲』をめぐって」「解釈と鑑賞」54巻11号　平元・11）

(16) 注(15)参照。

(17) もし、この〈故の吾〉〈本心〉の把握の中に文三の〈妄想〉の要素があったとしたら、それは恋敵昇への〈嫉妬〉から生じたのであろう。文三の昇に対する敵意は『浮雲』全篇に散在する〈昇如き犬自物〉〈人非人〉〈廉恥知らず〉といった蔑称の中に充分読みとることができるし、第十九回に於ても〈昇が全く家内に立入ッたから〉園田家は今のような有様になった、〈昇に狎れ親しんでからお勢は故の我を亡くした〉という記述となって現れてもいる。文三は既にお勢が自分を愛していないことを自覚してはいるが、感性の部分で惹かれているお勢を昇にだけは渡したくないのである。文三は、今のお勢が昇に〈感染れ〉ているにすぎないと捉えているが、それが事実と反するならば文三の言う〈故の吾〉〈本心〉も〈妄想〉と呼ぶべきものなのかもしれない。が決して第十六回の〈識認〉と対立する〈妄想〉ではないのである。

Osaka Shoin Women's University Repository

(18) シンポジウムでの指摘による。注(15)参照。

。本稿で引用した『浮雲』本文は『二葉亭四迷全集』第一巻（筑摩書房　昭59・11）に拠ったが、旧字体は新字体に改めた。